

後藤政志さんのお話を聞いて

文責；権上かおる@酸性雨調査研究会
kaorin_gj@mbn.nifty.com

技術者対象の講演を聞く機会を得ました。私が聞いて感じたこととして、報告いたします。

後藤さんは、元東芝の技術者で、原発の格納容器を設計されていた方です。2011年3月16日付け東京新聞「こちら特報部」を嚆矢に、今回の事故に関して元原発技術者の立場で発言を続けておられます。これまでもペンネームでは発言されておりましたが、実名にて「楽観論が最悪事態を招く」主旨のお話をされています。インターネットインタビュー・対談動画も多く配信されています。

今回の講演は、事故については直接的なテーマではなく、「このような事故に対して技術者として、なにをなすべきか」という点に軸足がありましたが、まさに事故後の後藤さんの行動は、答えのひとつを示しているように感じました。もし、一連の後藤さんの発言がなかったら、政府の会見やメディア報道では、私たちはさらに事故について知ることができなかつたでしょう。

福島原発事故に関する要旨

- ・ 1, 2号炉GE、3号炉東芝、4号炉日立製
- ・ 原発の安全は3つに集約 - 止める / 冷やす / 閉じ込める
 - 「止める」については、ひとえに制御棒がきちんと制御されていることが、大前提であるが、ここ数年間の制御棒事故の多さに愕然とする。
 - 「冷やす」については、炉心溶融を起こさないための必須条件だが、今回は起こったことは周知の事実
 - 「閉じ込める」については、格納容器の排気を行うベントには、2種類あり、水中を通して排気し、放射性物質を除去するウェットウェルベントではなく、上部から水を通さないで排気するドライウェルベントという禁じ手を使って格納容器内の気圧を下げることを行っている。これだけでも閉じこめ失敗。それ以上に格納容器そのものが損傷したため、閉じこめ機能は失われている。
- ・ 建屋内の使用済み核燃料プールは、置かれていることは公開されていたが、今回の事故を予想よりはるかに大きくしている要因
- ・ 原子力安全委員会は、安全基準（正式名称書き取れず）は、原発がシビアアクシデント（苛酷事故）に至る可能性は確率的に極めて低いとしている。したがって、設計以上の事故については、民間の自主基準の扱いにとどめられていた
- ・ 極めて高度に細分化された技術が原発。全体を管理する体制は極めて脆弱であった
- ・ 低濃度汚染水をそのまま海に排出は、許されないこと。一定数の船を用意し、その中に排水。メガフロート一艘では、賄えるわけではない。あとは費用の問題だけ
- ・ スリーマイル、チェルノブイリ事故後からの時間の経過もあり、'原発安全神話'は、事業者・安全委員会など運営関係者自身も信じさせてしまった感が大きい
- ・ 何千、何万倍ものエネルギーを生み出す物質は、人間の制御がきかないものともいえる
- ・ 原発事故は放射能の恐怖と経済的な危機が起こることが、シビアアクシデントの現実
- ・ このような欠陥商品でも製造物責任法も原発には適用されない

後藤さんのお話は、声高に叫ぶのではなく、むしろ静かに淡々とした口調であった。また、彼を支える技術者などの仲間がいるので、この行動がとれたとも語っておられた。漠然ともっていた解決までの長期化は、確信になり、さらにさらに長い期間が必要になると強く感じた。

以上